

特集

皮膚科医ならおさえておくべき 肥満細胞・肥満細胞症

羅針盤

肥満細胞症を巡って



山本 俊幸

Yamamoto Toshiyuki

福島県立医科大学医学部
皮膚科学講座 教授

肥満細胞は、Paul Ehrlich によって 1877 年に発見された細胞で、骨髄由来の CD34 陽性前駆細胞が各臓器へと運ばれ、そこで成熟し最終分化を遂げる。肥満細胞はアレルギー疾患だけでなく、感染防御、免疫反応、線維化機構、血管新生、発がんなどさまざまな生体応答に関与する。また、primary には関与していなくても、さまざまな皮膚疾患において肥満細胞は増数している。肥満細胞症は文字どおり肥満細胞がさまざまな臓器でクローナルに異常増殖してみられ、皮膚はその代表的な臓器である。

本特集では肥満細胞症をさまざまな観点から執筆いただいた。

Part1 総論では、皮膚肥満細胞症の臨床像、病理組織像、病態、疫学、基礎研究のトレンド、治療の展望などにつき概説いただいた。この章では、肥満細胞症の現時点での考え方、最新の情報に触れていただきたい。

Part2 肥満細胞症の臨床では、典型的な症例や非

定型的な症例を紹介いただいた。稀な臨床像、水疱形成、Darier 徴候、ダーモスコピー所見なども紹介していただいた。この章では、日常診療で遭遇する機会は少ない肥満細胞症の実際例について学んでいただきたい。

Part3 では、肥満細胞症以外の疾患で、secondary に肥満細胞が関与する（と思われる）疾患をいくつか取り上げ概説いただいた。神経線維腫は、その病理組織像において多数の肥満細胞が浸潤してみられることが以前から知られている。神経線維腫を構成する腫瘍細胞（Schwann 細胞や線維芽細胞）と肥満細胞が相互作用をしていると予測され、単発性／多発性神経線維腫、神経線維腫症の病態に肥満細胞の側面からアプローチすると面白いと思われる。

ほかにも、乾癬、肉芽腫、膠原病（皮膚筋炎、エリテマトーデス、強皮症）などにおいても、肥満細胞が何らかの役割を果たしていると思われる。この章では、さまざまな皮膚疾患、皮膚病変における肥満細胞に注目していただきたい。

また、ここで取り上げることができなかったさまざまな疾患においても、肥満細胞は何らかの役割を果たしていると思われる疾患がいくつもある。この 1 冊で肥満細胞・肥満細胞症に対する理解を深めていただきたい。